

深川純一

このたびはまた、足立先生のお肝煎りでお招きを頂きまして誠に有難うございました。今日は、ローターアクトの人達や新会員の方々もご参加と聞いておりますので、職業奉仕を理解するために一番大切なことは一体何か、という視点からお話しを申し上げたいと思います。

昨年は、職業奉仕の根本原理をお話し申し上げました。ロータリーは倫理運動でありますから、倫理の問題としては、人間の行動パターンを愛情の世界と打算の世界に分析して、職業奉仕というものは、愛情の世界の論理を持って打算の世界をコントロールするもの、言い方を換えれば、打算の世界である職業に愛情を込めるといってお話し致しました。

そこで、今日は少し視点を変えまして、一つの物語から話しに入って行きたいと思うのであります。それは「**韋駄天**」という仏様の物語であります。これは、今の**天皇陛下**が未だ**皇太子殿下**であらせられた頃、宇治の黄檗宗の総本山**万福寺**をお訪ねになったときの話であります。

接待にでられた御老師は、「自分は禅坊主だから、この寺が紀元何年に建てられたとか、この扁額は誰が書いたとか、そのような俗な話をするわけにはいかない」と言われて、皇太子殿下に『**韋駄天**』という**仏様**の話をなさいました。

韋駄天という**仏様**は、どのような**仏様**かと申しますと、**仏様**にも色々**位**がありまして、最も**位**の高いのが、**阿弥陀如来**、**大日如来**のように名前の下に**如来**という言葉のついている**仏様**、そして、その次の**位**が、**勢至菩薩**、**普賢菩薩**のように**菩薩**という字の付いている**仏様**、そして、更にその下の**位**が、**毘沙門天**、**帝釈天**、**韋駄天**のように**天**という字のついている**仏様**であります。

この**天**という字のついた**仏様**は、どのような**役目**をもった**仏様**かと申しますと、私達の日常生活**万般**のことを司る**役目**をもった**仏様**のことでありまして、その中の**韋駄天**という**仏様**は、どのような**役目**をもった**仏様**かと申しますと、夜の帳に終わりが参りまして、東の空が白んで参ります。

やがて、山の端に太陽がチラッと覗きます。朝日がサアッと大地にさして来る、その一瞬を捉えまして、**仏様**の懐から出て、**仏様**の御使いとして、全世界の家庭を訪れます。

そして、足立パストガバナーのお宅を訪れて窓を開けて、今日一日この足立家に**仏**の**幸せ**がありますようにと祈ります。そして、今度は、**会長**のお宅を訪れて、今日一日この**家**に**仏**の**幸せ**がありますようにと祈ります。

このようにして、**朝日**がサアッと**大地**に差し込んだ**一瞬**の内に全世界の家庭を訪れて**幸せ**を祈り、そしてまた**その一瞬**の内に**舞い戻って**、只今全世界の家庭に**仏**の**幸せ**を祈って参りました、と**復命**をする**役目**をもった**仏様**のことを**韋駄天**と

いうのであります。

韋駄天という言葉は、ご承知のとおり『韋駄天走り』という言葉があるように、非常に早いことの意味に使われるのはこのことなのであります。御老師は、皇太子殿下に『貴方は、やがて天子様になられるお方でございます。今日の老僧との出会いを大切になさって、この世の中に、毎朝、全ての人の幸せを祈る韋駄天という仏様のいることを心に留めておられますように』という話をされたそうであります。

申すまでもなく、この話は帝王学の根底に流れる思想を説いています。即ち、私達は人間である以上、世の中には、好きな人もいます。しかし、嫌いな人も、憎い人も沢山居ます。にも拘わらず毎朝その全ての人達の幸せを祈る韋駄天の心、これは天子様にとっては、欠くことの出来ない心であろうかと思うのであります。ところで、私は、この韋駄天の心は何も天子様に限らず、ロータリアンの心の根底に流れる思想でもあると思うのであります。何故ならば、ロータリアンは、皆、社会の管理者として長たる立場にある人であります。凡そ組織の長たる立場にある者は須くこの韋駄天の心がなければならぬと思うからであります。例えば、会社の社長さんについて言えば、長たる者が、毎朝、自分の部下将兵の幸せを祈る心をもっているか否かにより、その会社のあり方が違ってくるだろうと思うのであります。

この韋駄天の心をもったロータリアンの会社は、恐らくどのような不況期にも潰れないであろうし、長期的に安定した利潤を着々と獲得して行くであろうと思うのであります。では、そのことを立証する事実があるのか。

実は、1929年に始まるアメリカ経済社会を襲った空前絶後の大パニック。あの時に、ロータリアンは一人も倒産していなかったのであります。それは将に、職業倫理を身につけ、職業奉仕を実践していた功德だと謂われています。したがって、韋駄天の心は職業奉仕の核にある思想でもあると思うのであります。

そして更に、世界中の全ての人達の幸せを祈るこの韋駄天の心は、職業奉仕に限らず、社会奉仕、国際奉仕、世界社会奉仕等ロータリーの全ての奉仕の実践をするについても、ロータリアンの心の根底に流れる思想であろうかと思うのであります。世界中の全ての人達の幸せを祈る韋駄天の心、これはロータリアンにとって欠くことの出来ない心、終生肝に銘ずべき心であろうかと思うのであります。1962-63年度の国際ロータリー会長、インドのカルカッタ・ロータリークラブから出ました偉大なロータリーの思想家ニティッシュ・ラハリーは、『世界中の何処かの片隅に、一人でも不幸な人がいる限り、我々ロータリアンは永久に幸せになることが出来ない。心の中に火を燃やそう **Kindle the spark within !**』と謂う有名なターゲットを打ち上げました。

これは、誠に、東洋的な神秘的なターゲットでありまして、心の中に火を燃やす

ことによって、この世の中を明るくしていこうというのであります。そして、そのためには、私達ロータリアンが、この世の中の**全ての人達の幸せ**を祈らなければならない、とラハリー元会長は**呼びかけている**のであります。

ロータリアン全てが**お互いに幸せを祈り合う**、そのようなロータリーであって、始めて世界平和の実現に寄与することが出来ると思うのであります。

したがって、ロータリアンの皆さん方が、自分の**企業を管理**するに際しても、更に、地域社会、国際社会に奉仕するに際しても、**毎朝全ての人達の幸せを祈る韋駄天**という仏様が居ることを心に留めておくべきであると思うのであります。実は、**ロータリアンとは**、その心の根底に韋駄天の心を持っている人達のことであると思うのであります。

このように、ロータリアン一人ひとりの**心の中にあるものが大切な**のであります。幸せを祈るという目に見えない大切なものを心の中にを籠めること、これがロータリーの中核にある考え方であると思うのであります。したがって、私は、ロータリーは**祈りの哲学**であるとも考えているのであります。

さて、今年3月11日、**東日本大震災**が発生しました。国内はもとより国外からも沢山の**義捐金**が集まり、**ボランティア活動**が行われています。これは日本のみならず世界中の人達が被災者の幸せを祈ってくれている**証し**であります。

ただ、今回の災害は、地震、津波のみならず更に原発事故が加わったために、被災の状況が複雑であります。そのため、未だに復興どころか復旧もままならない状況であります。しかし、世界中の人々に被災者の幸せを祈る心がある限り、やがて、東日本は復旧、復興を成し遂げ、日本社会はこれを契機に大きく変わって行くだろうと思うのであります。

先程、**心の問題を重視**するのがロータリーの奉仕だと申し上げました。そこで、この心の問題で一番大切なものは何か、それは倫理であります。したがって、ロータリーは倫理運動と謂われているのであります。

殊に、ロータリアンは皆、職業人でありますから倫理の中でも職業倫理が最も大切であります。そこで今度は少し視点を変えて職業倫理の事例を紹介します。

今月は御承知のとおり**職業奉仕月間**であります。実は、この季節は、**落鮎**の季節でもあります。落鮎というのは秋に獲れる鮎のことであります。北海道に鮎が居るかどうかよく知らないのでありますが、鮭と同じ鱒科の魚であります。

鮎は、一年魚でありますから、一年で育ち切って、秋になると、自らの血脈を残すために川を下ります。そして、河口近くに産卵して、一年の短い一生を終えるのであります。

しかし、全ての鮎がこの様に**天寿**を全うするわけではありません。多くの鮎が人間に釣り上げられて命を落とします。就中、**鮎の友釣**は、**鮎の悲しい習性**を利

用した釣法であります。即ち、

鮎の社会では、自分の餌場を確保するために、激しい競争原理が支配します。強い鮎がテリトリーをもって餌場を独占し、他の鮎がそのテリトリーを侵すと、猛然と攻撃してこれを追っ払います。この習性を利用して、釣針を仕掛けた罔鮎を野鮎のテリトリーへ誘導し、野鮎の攻撃を誘って釣り上げるのであります。

したがって、もし、鮎達に餌を皆で分かち食う共存共栄の心があったならば、鮎の友釣は成り立たないのであります。

ところで、このような鮎の競争社会で、自分の餌場を独占して自分だけが大きく育って行こうとする鮎の生態を思うとき、同じく自由競争原理の支配する私達の職業社会は、果たして如何なものであろうかと思うのであります。

鮎のように自分だけが市場を独占して、自分だけが大きく隆々と栄えて行こうとする経営者が居ることは如何なものでありましようか。

先ず『**同業者**』の問題があります。資本制経済社会は、**自由競争**が基本原則であります。したがって、自由競争社会では、同業者は、正に**食うか食われるか**の関係にあり、競争相手がいるが故に、ある種の**危機感**を持ちます。したがって、自分が潰れる前に彼が潰れてほしいという**訳の判らない感情の虜**にもなります。

また、同業者は同じ業界にいますから、お互いに、善いところは知っています。しかし、お互いに**悪いところも、醜いところも、汚いところも**知り尽くしています。したがって、彼は俺の**欠点**を知っているなという**意識**がありますから、お互いに**心を開く**ことができません。

更に人間は、自分だけは先ず栄えておかなければ、いつ潰されるかも知れないと思えますから、**人のこと**など考えている暇はない、即ち**倫理のこと**など考えている暇はないと言って、自分だけ隆々と栄えて行こうとします。そのために失敗する例が沢山あるのであります。一つの**事例**を出しておきます。

或る**下請業者**が親会社から自分の生産能力を越える注文を受けました。下請業者は喜んで、銀行から融資を受け、第二工場、第三工場と設備投資を致します。ところが、この設備投資がある程度大きくなった時点で、親会社が注文を止めます。下請業者は、受注の減少によって融資の返済に困り、親会社に泣きつきます。親会社は、それでは金を貸そうと言って資本参加をして、結局、下請業者を乗っ取ってしまうのであります。

これは、企業が比較的短期間に大資本に成長していくプロセスでよく見られる恨みつらみのある物語であります。一般社会の常識では、この事例について、これは親会社の方が悪いというでしょう。

しかし、**ロータリーの考え方**はそうではありません。これは親会社が悪いのではなく、下請業者が自分一人で儲けようとしたところに問題があるのであります。一般社会の常識とは逆転の発想であります。即ち、

自分の生産能力を越える注文が来たときに、同業者も居ることですから、これ以上の御注文は同業者の方へどうぞ、と言っておればよかったです。

しかし、そうは言うものの企業経営者は、自分の企業を安泰にさせたいために、注文が来れば、どうしても沢山注文をとって儲けたくくなります。これが人情であります。ここのところが大変難しいのであります。

これに反して、例えば、**或る有名な菓子屋**では、いつも午後3時頃になると、商品が売切れます。有名な店だから作れば作るほど幾らでも売れるのであります。が、午後3時頃になると売切れてしまう、その程度の商品しか作らないのであります。**それは一体何故か？**

確かに、作れば作るほどいくらでも売れます。儲けに儲けることは出来ます。しかし、自分の生産能力を越えて、**150% 200%**の商品を作れば、儲かるかも知れませんが、**粗悪品の出る可能性**も出て来ます。一つでも粗悪品が出ると、お客様に**御迷惑**をかけることになり、更に、**自分の信用**を傷つけることにもなります。**信用**というものは、金銭をもってしては計り知れないほど**価値のあるもの**であり、一旦失ったら**取り返しの付かないもの**なのであります。

したがって、精魂込めて自分の生産能力の**80%**の商品しか作らないのであります。これが「**職業の倫理**」というものであります。

そして、自分の生産能力を越える注文に対しては同業者の方へ譲るのであります。これが**同業共存共栄の倫理**であります。

このように、古来、人間が徒らに**金を求めて身を滅ぼした例は枚挙に暇がありません**。しかし、人間が**心を求めて即ち、倫理を求めて身を滅ぼしたことは、未だその例を聞かないのであります**。

ロータリーは、**倫理の裏打ちのある企業活動**こそが永続的に安定した利潤を着々と獲得し、自由競争を必ず勝ち抜いて行くということを**原理論的にも実践論的にも証明して行くもの**なのであります。

一体そのようなことが証明されているのか。既に証明されている事実としては、**1929年に始まるアメリカ経済社会を襲った空前絶後の大パニック**。あの時に、ロータリアンは一人も倒産していなかったという事実があります。これは、ロータリアンが毎週一回の例会において**企業経営上のアイデアを交換し、倫理的な企業活動のノウハウを開発し、それを自らの企業に実践してきた功德**だと謂われているのであります。この故に、ロータリーの**職業奉仕は、不況期に強い哲学**であるとも謂われているのであります。

では、**ロータリアンだけが倒産せずに生き残ればよい**というのか、と言うと、そうではありません。ロータリアンは、**職業奉仕の原理を実践することにより、必ず自由競争の勝者になる**ことができます。そして、**勝者になる過程 Process**において、自由競争に破れて行った**敗者の代弁者**となって、世のため人のために力

を尽くさなければならないということをロータリーは説いているのであります。

殊に、ロータリーは倫理運動の視点に立って、同業関係や下請関係においては、常に倫理を提唱し、共存共栄の道を模索すべきことを説くのであります。

これは、職業奉仕の大きな柱であり、ロータリーが倫理運動であることの面目躍如たる場面なのであります。

真にロータリーは、人類文化史が20世紀の時代に刻印を打った職業人の最も優れた倫理運動なのであります。このことは、ロータリーの綱領を見れば、一目瞭然に諒解されるのであります。

以上を要するに、同業関係を貫く指導理念は同業共存共栄であります。ロータリーの職業奉仕は、如何にすれば同業共存共栄の実を上げることができるか、という原理を説くものであります。

そこで、ロータリーは、この問題については、かなり理性的な分析をしまして、自由競争の長所と短所を引出すことに成功しているのであります。

先ず長所は何か。自由競争は技術開発に役立つのであります。競争でありますから新しい技術を開発します。したがって、製造技術・販売技術、その他諸々の技術開発には大変役立つのであります。

次に短所は何か。自由競争には同業者が居ますから、互いにある種の危機感を持ち、疑心暗鬼になります。これを取り除かなければ同業共存共栄の理想を達成することはできません。

そこで、疑心暗鬼を取り除くためには、例会で良質な Idea を開発し、これを業界に持って行って同業者と Idea の交換をする必要があります。そのためには、先ず同業組合を結成して、皆で共同して Idea を開発しなければなりません。

勿論、同業組合が全国的になると各地のロータリアン達が参加します。そこで、ロータリアンは、手に手つないで同業組合育成にリーダーシップをとるようにしなければなりませんのであります。これが職業を通じて世のため人のために奉仕することになるのであります。

同業者が Idea の交換、Idea の共同開発を行った上で、自由競争のための武器である Idea は、お互いに平等対等に持って、自由競争は自由競争で一生懸命にやろうというのがロータリーの同業関係における基本的な図式（武器対等の原則）であります。自分だけが優れた Idea を持って栄えていこうというのは、自分のことしか考えないエゴイストであり、到底世のため人のためのことを考えているとは謂えないのであります。

同業者が、手に手つないで Idea の共同開発をする、その元になる良い Idea は、ロータリアンがロータリークラブの中から持ってくるという図式であります。

では、具体的には、一体どのような方法によるべきなのか。

ロータリアンは、自由競争社会において職業奉仕を実践することにより、必ず

勝者になります。その勝者になる過程 **Process** において、或いは勝者になった後で、**敗者の代弁者**になって救済の手を差し延べなければなりません、その方法は、先ず、自分が成功して勝者になったノウ・ハウを敗者に公開することであり、次に、**職業人として為すべきこと為すべからざることをお互いに誓い合うこと**、いわゆる**職業倫理の提唱**であります。

第一に『ノウ・ハウの公開』。

先ず、同業者間の疑心暗鬼・危機感を払拭して、共存共栄の実を上げるためには『ノウハウの公開』が必要不可欠であります。

ロータリアンがクラブ例会に出席して得た諸々の Idea を、自分の企業に適用することにより成功したならば、その成功したノウ・ハウを同業組合にもって行って同業者に披露するのであります。

ノウ・ハウを公開すれば、自由競争に負けてしまうと考える人がありますが、実は、返って共存共栄の実が上がるのであります。即ち、

ここで所謂ノウ・ハウとは、産業秘密的なものではありません。成功することが完全に証明されたノウ・ハウのことです。何故ならば、もし、成功することが証明されていないものを公開して、それを適用した人が失敗すれば、他人に迷惑をかけることになり、世のため人のためにはならないからであります。

成功することが完全に証明されたノウ・ハウを同業者のために、更に自由競争に破れて行った敗者のために公開するのであります。事例を紹介しておきます。

1954年度RI会長ハーバート・テイラーは、1932年に倒産したアルミ食器会社の再建を依頼され、約10年後に一流の企業に育て上げましたが、それを見たシカゴ商工会議所の人達が、テイラーに対し『君は素晴らしいことを成し遂げたね。何か秘密があるだろう。手のうちを明かせよ』と言いましたところ、テイラーは『実は、四つのテストというものを考案して皆で力を合わせて頑張ったんだ』と答えました。そこで、商工会議所の人達は、『そのノウ・ハウは、君が成功したことによって完全に証明されている。それを皆に披露しよう』といって商工会議所傘下の企業家達に公開されることになったのであります。

これを見て、シカゴクラブの会員達が、『それをロータリーへ譲らないか』と謂うことになり、1954年、彼が国際ロータリーの会長に就任したのを契機に、その**版権を国際ロータリーへ委譲**したのであります。これは商工会議所からロータリーへ逆輸入された例であります、**本来はロータリークラブでノウ・ハウを開発し、それを同業共存共栄のために同業組合で公開し、更に商工会議所で公開する**というのがロータリーの奉仕の図式であります。

ノウ・ハウ公開の事例をもう一つ紹介しておきます。

千葉医大の中山恒明教授は、従来、死亡率90%以上と謂われた食道癌について

て、2年間訓練された外科医であれば誰でも簡単に手術できる手術法を開発して、そのノウ・ハウを誰にでも教えたのであります。その理由は、自分一人では一日に100人の患者を手術することはできないが、このノウ・ハウを100人の外科医に教えておけば、一日に100人の患者を救うことができる。医は、公のものであって、私にすべきものではないというのであります。

これは、中世ヨーロッパ以来の **profession** の倫理、即ち、医学が神学の分かれであることを大悟徹底した人の言葉であります。

序でながら、中山先生は『医師になってほしい人は、頭の良い人であるに越したことはないが、剃刀のように切れる鋭い頭脳の持ち主よりも、動物や草花を愛する人間性の豊かな人に医師になって欲しい』とも言っておられるのであります。これは将に、倫理的な人間に医師になってほしいということであり、人を救うことを職業の第一義とする **profession** の倫理、即ち、愛をもって職業をコントロールするために、欠くことのできない要素であろうかと思うのであります。

何はともあれ、同業共存共栄のためには、ノウ・ハウを公開すべきであります。同業が栄えるということは、必ず自分も栄えることになって来るのであります。したがって、自分が栄えるために同業者が潰れてほしいなどという論理は、ロータリーでは通用しないのであります。

更に、事例を紹介しておきます。

西ドイツが未だシュミット首相の時代の古い話であります。首相が破産寸前のイタリアを救うために、返済の見込みのない20億ドルの借款を与えようと議会で提案した時に、議会の猛反対に対してシュミット首相は、『イタリアの崩壊はヨーロッパ共同体の崩壊を意味する。ヨーロッパ共同体が崩壊すればドイツも危ない。したがって、ドイツが生き延びるためには、イタリアを救わねばならない』という論理をもって議会を説得したそうであります。

やはり、他人を生かしてこそ自分の生きる道もある。ロータリーの説く共存共栄というのは、かなり厳しいものでありまして、このことも心に留めておかなければならないと思います。これは今の世の中にも当て嵌まる論理であります。

ロータリアンは、よく「相手の身になって考える」ということを簡単に言いますが、「相手の身になって考える」ということは、自分の考え方を崩してしまうことを意味します。したがって、このことが非常に厳しいものであること、そして、そのことがこれからの時代を生き抜く道でもある、ということをお心に留めておかなければならないと思うのであります。

要するに、自由競争には、甘えの論理は全くありません。したがって、自由競争を前提とする職業奉仕にも甘えの論理は全くありません。時々、誤解をして、奉仕というある種のロマンチズムに酔って競争意欲をなくしてしまう人があります。即ち、自分はロータリークラブを退会して、自由競争で思い切り金を儲

けた後、再びロータリーに入会して奉仕するという人がいますが、これは職業奉仕を全く誤解しているものであります。

職業奉仕は、同業者との関係では将に鬭争の論理なのであります。甘さは一切ありません。したがって、**鬭争に勝とうと思えば、職業奉仕に徹すること**であります。したがって、職業奉仕の判らないロータリアンは自由競争に敗れていくと思うのであります。

最近、**ロータリーを辞めていく人**が増えていますが、これは職業奉仕が判らないからであります。また、これはロータリアン教育の問題でもあります。本当に**職業奉仕が身に付いたならば、ロータリーを辞めることはありません**。職業奉仕の**魅力の虜**になって、隆々と栄えて行くだろうと思います。昔は、一旦、ロータリーに入会すれば、退会する人など殆ど居なかったのであります。

自由競争社会を生き抜いていく時に、勝利者になる過程において、敗者を救済しながら栄えていく、共存共栄の道を模索することによって、初めて、自分は、一私企業の社長にとどまらず、世のため人のための支柱にもなっているのだ、という自覚を持つことが出来るのであり、自分のためのものである職業が、同時に人のための奉仕にもなるのであります。

ここに**人生の意義**があるのであって、自分のことしか考えない人生には何らの意味もありません。自分も儲けるが、その儲ける考え方は、同時に、周りの人達も儲ける策を作って行く、こういう形になって初めて、二度とない人生を意義あらしめることができるのであります。これは、**甘えの論理**ではないので注意を要する所であります。

第二に『**倫理の提唱**』であります。自由競争の敗者を救済する第二の方法であります。同業者の共存共栄のためには、ノウ・ハウの公開の他に『**倫理の提唱**』が必要であります。業界を浄化して、共存共栄の実を上げるためには、**同業者が互いに、為すべきこと為すべからざることを誓い合い、これを自由競争の敗者に、更に地域社会の職業人に対して提唱する必要がある**のであります。これはロータリーが**倫理運動**であることの面目躍如たる場面であり、職業を通じて社会に奉仕する**典型的な事例**であります。即ち、

ロータリークラブの**例会**は、良質な職業人の発想の交換・自己研鑽の場であります。ロータリアンは発想の交換・自己研鑽によって、よりよき自分というものを自覚していくわけではありますが、それぞれは**企業経験**を中心にしていきますから、**企業経営観の改善**という形につながって行きます。

そこで、その**経営観の総和**をとらえてみると、地域社会に存在する全ての職業に適用せられるべき理想的な職業観、職業の倫理を宣言することが出来るのであります。

ロータリーが最初にこの宣言をしたのが、**1915年**のサンフランシスコ国際

大会の決議による『全分野の職業人を対象とするロータリー倫理訓』（所謂ロータリー道德律・11ヶ条）であります。

その後、昭和3年(1928)大連ロータリークラブの古沢丈作氏がこれを発見し、5ヶ条の日本語に書き改めたのが、昭和3年の『大連クラブのロータリー宣言』であり、これが戦前の日本のロータリアンの職業奉仕のバックボーンとなっていたことは、紛れもない事実なのであります。

次に『商工会議所』の問題があります。

同業関係においてノウ・ハウを公開し、職業倫理を提唱していくために、同業組合結成運動の延長線上に商工会議所育成運動があります。これが同業関係においてロータリアンの進むべき道であります。

1930年頃から1945年頃にかけて、ロータリーがアメリカ社会から非常な尊敬と信頼をもって迎えられたことがあります。それには、彼等が、世のため人のためにこれだけのことをしたという確固たる実践の軌跡がなければなりません。

では、その確固たる実践の軌跡とは一体何か、と言うと、実は、1929年から始まったアメリカ経済社会の空前絶後の大恐慌に際し、アメリカのロータリアンが職業奉仕の実践の一つとして、自由競争に敗れていった敗者を救済するためにノウ・ハウを公開し、倫理を提唱し、そして、その手段として同業組合を作り、商工会議所を育てて行った、そのことが、アメリカ社会から大変な尊敬と信頼をもって迎えられたのであります。

このように、ロータリーがアメリカ経済社会の中で果たした最大の功績の一つが同業組合の結成運動と商工会議所の育成運動であったのであります。

1910年から1942年まで32年間国際ロータリーの事務総長を勤めたチェスレー・ペリーは、『ロータリーが出来た時のことを考えてみよう。アメリカ社会に同業組合は一つもなかった。これはロータリーが作って行った。商工会議所はあるにはあった。しかし、南北戦争後の工業化の波による人口の都市集中により、都市機能が麻痺し、商工会議所はその行方を見失っていた。この同業組合のないところに同業組合を作り、やる気をなくしていた商工会議所を、倫理を提唱する団体として蘇らせていったのはロータリーがアメリカ社会に残した最大の功德だ。ロータリーの功績歴然たるものがある』と言い切っているのであります。

このように、同業組合と商工会議所とは、非常に大切な機能を持っているのでありまして、ロータリー運動がアメリカ社会に残した最大の功績なのであります。したがって、ロータリーの中で職業倫理の原型パターンを作り、それを商工会議所に移植して周知徹底させる、これがロータリアンの進むべき道であります。したがって、日本のロータリアンは、同業組合の体質改善を図り、商工会議所をロータリーの経営理論に合わせて運営するという具合に、商工会議所の中でリーダーシップをとるようにしなければならないと思うのであります。

何はともあれ、ロータリーは倫理運動の視点に立って、同業者関係や下請関係においては、常に倫理を提唱し、共存共栄の道を模索すべきことを説くのであります。これは、職業奉仕の大きな柱であり、ロータリーが倫理運動であることの面目躍如たる場面なのであります。

さて、今、同業関係について申し上げましたので、その関連から下請関係についても触れておきます。ところで、資本主義経済社会は、分業を通じて発展して来たものであります。イギリスのグラスゴー大学のアダム・スミス教授の著書、経済学のバイブルといわれる『国富論』の冒頭に出て来るのが、実は**分業**なのであります。

現在、資本主義社会は、分業によって効率を高めて行くところから、簡単な商品を生産する場合でも、下請との関係を持たない会社は殆どありません。部品などは専門家に任せた方が良質なものを安く作ることが出来るので、人間は、分業に分業を重ねて来たのであります。

ところが、**分業の当事者**、即ち、親会社と下請との間の力のバランスが崩れていて、資本力は、原則として親会社の方が強いのであります。そこで、ローマの諺に『人は人にとって狼である』と言われるように、力の強い者が弱い者を犠牲にして行くことになるのであります。

ここにマルクス・レーニン主義が出て来た一つの原因があります。例えば、物を作って売って1円の金を得たとします。1円というものは交換価値でありますから、1円と等価値の物と交換出来ます。そこで、これを1万倍して1万円の金を持っているとすると、1円の物を1万倍した物しか買えないか、と言うと、実はそうはならないのであります。

交換価値を**交換力**と考えますと、1円の1万倍は、数値の上ではまさに1万円になります。現実には物と交換する場合には、1万円以上の物と交換することができるのであります。したがって、1万円持って居る人と1円しか持っていない人とでは、交換力に差が出てくるわけであり、したがって、大資本は益々大きくなります。

この点が、マルクスの言う『資本の論理は力の論理』であって、マルクス主義は、このアンバランスを**国家権力**によって調整しようとする**発想**なのであります。

ところが、ロータリーは、**倫理運動の立場**から、このアンバランスを**徳の力**によって調整しようとし、**徳**というものは、目に見えないものであります。何億円にも替え難いほど価値のあるものであります。この**徳の力**を一枚入れる、これが倫理運動たるロータリーの考え方であり、この考え方から、**二つの倫理原則**を出すことが出来るのであります。

第一に『利益の適正分配の原則』があります。これを一言で言えば、『人を泣かせて、その上に自分の幸せを築くなよ』と言うことであります。

資本主義経済社会は、自由競争を前提としています。自由競争は、無駄なエネルギーを節約するために**競争入札**をします。しかし、力のバランスが崩れていると、力の強い者が弱い者を叩くという現象が起こります。元請から下請、下請から孫請へと叩いて行きます。

ところが、あまりに叩きすぎると、やがて、**叩かれた方が裏切る**こととなります。したがって、**搾取の系列による構造の業界**は、この点をよく考えなければなりません。何故ならば、これでは、**共存共栄**は果たせないからであります。まさにこれは**商工会議所**や**同業組合**が**リーダーシップ**をとるべき場面であり、**ロータリアン**が**リーダーシップ**をとるべき場面であります。

要するに、これは「**公平の原則**」であります。しかも、「**法的原則**」ではなく「**倫理原則**」であります。**事例を紹介**しておきます。

ハーバート・テイラーに再び登場願うこととなりますが、1932年に倒産したアルミ食器会社の再建を引き受け、10年後に一流の企業に育て上げた時に使ったのが、実は、この「**公平の原則**」なのであります。

或る日、彼は、印刷業者と契約をしました。ところが、契約を締結した後で、その印刷業者が自宅に帰ってから、自分の計算違いのため、その契約では大変な損失を被ることが明らかになりました。しかし、契約は締結されてしまっているので今更取消することもできません。さればとって、損をすることが判っているながら真面目な仕事ができるかどうかも判りません。そこで、彼は、断られても元々だと思って、テイラーに事情を打ち明け、契約のやり直しを申し入れました。

テイラーは『それはお気の毒だ。しかし、皆の意見を聞かなければならない』と言って、この問題を取締役会にかけました。取締役会では、『契約は締結されている。我々は一銭も値切らずに印刷業者の言いなりに契約をしたのだから、契約は守ってもらおう』と言う意見でありました。

しかし、テイラーは、『我々は、「**四つのテスト**」を誓い合っているではないか。この契約で**真実とは何か**、と云えば、契約通りにことを運べば相手が確実に損をするということである。しかも、この契約は、相手の**真実の意思**に基づいたものではない。錯誤によるものだ。そのことが、**みんなに公平**と言えるのであろうか、**好意と友情を深める**ことになるのであろうか、そして、**みんなのためになる**のであろうか』

という論法で取締役会を説得し、結局、印刷業者が損をしない程度に契約のやり直しをしたのであります。このことが口込みで業界に伝わり、テイラーの会社は大したものだ。彼と取引をすれば安心だと謂うことになり、益々信用を確立す

ることになったのであります。

これは、自分の会社が儲ける反面において、下請の印刷会社が泣く、即ち、『人を泣かせてその上に自分の幸せを築くなよ』ということ、利益は、親会社も下請も全てに適正に分配されなければならぬという**利益の適正分配の原則**の実践例であります。テイラーは、自分と取引をする全ての業者に対して利益の適正分配を何時も考えたと言います。これが、**徳の力によって資本力のアンバランスを調整する実践例**なのであります。

要するに、ロータリーは倫理の世界でありますから、倫理的に物事を処理しなければなりません。法律的に処理しなければならない場合には、倫理の裏打ちのある法律論を出すことを考えなければならないのであります。

ところで、**倫理運動**としてのロータリーの立場からは、**下請に対する支払は**、出来るだけ現金をもって支払うのが望ましいのであります。**小切手は**、大金の支払にだけ使うべきであります。**手形**をきる場合も、3ヶ月を限度とすべきであり、それ以上の長期は下請を泣かせることになります。

台風手形（二百十日・7ヶ月）や飛行機手形（滅多に落ちない）などは、人を泣かせること甚だしいものであります。元来、このような手形は流通性がありませんから、このような手形を発行すること自体、自らの信用を失うことになるのであります。

それでは、**反対に手形で支払をうけた時は**、どのように対処すべきでしょうか。『**支払期日7ヶ月、210日**よろしゅうございます。期日まで金庫に入れておいて、期日がくれば手形交換に回しますから、どうぞ御心配なさいませぬように』と言え、**相手も多少恥ずかしく**思います。このようなことを通じて、世のため人のために相手を**教育**していくこともまた大事なことであります。

また、このようなことを通じて、**徐々に業界を浄化して行く**、これが職業を通じて世のため人のために、と謂うことの一つの意味であろうかと思うのであります。また同時に、あの会社は、信用状態**100%**だということになって、自らの信用が確立するに至るのであります。

第二に『**賄賂禁止の原則**』があります。

親会社と子会社、元請と下請その他あらゆる取引関係において、当事者の力のバランスが崩れると、力の弱い者が強い者に対して賄賂を贈るという現象が起ります。これは、自分だけが良い仕事にありつこうというエゴイズムの心に基づくものでありますから、もとより同業共存共栄・公正な取引社会の実現という理想にはほど遠いものであります。

そこで、ロータリーは、古来、**倫理運動の視点**から、賄賂の授受を厳に戒めて

いるのであり、これは職業奉仕論の核にある大きな柱であります。

昭和六年の日本の2代目のガバナー井坂孝のガバナー月信第1号(S.6.8.10)は、夙に有名であります。彼は、国際ロータリー第70地区のガバナーに就任して、全国のロータリアンが拳々服膺すべき職業倫理の三ヶ条を提唱しました。即ち、**第一に曰ク、ロータリアンたる者は約束を守るべし。**

第二に曰ク、ロータリアンたる者は賄賂を贈ることなかれ。

第三に曰ク、ロータリアンたる者は徒に慈善事業に憂き身をやつすことなかれ。

第一の**約束を守る**というのは、ロータリアンは職業人でありますから、契約を守ること即ち、契約的正義の実現を説くものであります。

更に、約束を守るということの中には、**時間を守る**ということが当然含まれています。時間は万人の共有物であります。時間を守らないということは、全ての人に迷惑をかけ、信用を失うことになるのであります。時間を守るということは、古来、ロータリーの**精神伝統**となっているのであります。

第二は、**賄賂を贈ることなかれ**。これは、言うまでもなく、賄賂の横行しない健全な取引社会・公正な自由競争社会の実現をめざすものであります。

第三は、**慈善事業の実践**を否定するものではありませんが、それに憂き身をやつしてはならない、即ち、慈善事業はロータリアンでなくてもできることでもあります。ロータリーの第一義はロータリアンの心の開発であり、それに基づく職業奉仕の実践によって自分の職業を安定させて、然る後に余裕があれば、慈善事業を実践してもよいと言うのであります。

要するに、井坂ガバナーの提唱は、**職業奉仕を中心とするロータリー観の提唱**であり、**ロータリーの神通力**は、実業の世界においてのみ発揮せらるべきであると言い切っているのであります。これは、**思想の系譜**としては、ロータリーの哲学者アーサー・フレデリック・シェルドンの系譜に属するものであり、井坂ガバナーの提唱に深い感銘を受け、これに共鳴されたのが神戸ロータリークラブの**直木太一郎**パストガバナーでありました。ここにシェルドンの思想の**日本における系譜**を見取ることができるのであります。

この3ヶ条の中で、職業倫理との関係で特に重要なのは、第二の『**ロータリアンたる者は賄賂を贈ることなかれ**』であります。

例えば、**下請業者**から挨拶代わりに**菓子折**を受け取って後で開けてみると、中に現金が入っていた場合に、これを**会社の会計**に入れて、自分は受け取っていないと言っても、受領の事実を否定することにはならないのであります。

これを受け取ると何が失われるのか？受け取った人の良心が傷つくことになるのであります。**パーシー・ホジソンの『奉仕こそわが努め』**という本の中にいい言葉があります。

『泥棒は、人の物を取る。しかし、取られた人は決して何も取られてはいない。泥棒は自分の心を盗むのである。詐欺ペテン師は人を騙さない。自分の良心を騙すのである。この傷は、生涯癒えることはないであろう』と。

これは、現象論ではなくて、**本質論**であります。したがって、**菓子折**は感謝の気持ちをもって受取ればよいのでありますが、**金**を受取ると、自分の**信用**が傷つくことになるのであります。**信用**というものは、何億円をもってしても購うことの出来ないほど尊いものであり、一旦失うと取返しのつかないものなのであります。

ところで、ここに**賄賂**というのは、法律上の概念ではありません。即ち、**法律上**、賄賂の授受によって収賄罪、贈賄罪が成立するためには、それを受け取る側が**公務員**でなければなりません。したがって、法律の世界では、**私人間**即ち、**私事**の間には賄賂罪は成立しないのであります。

しかし、ロータリーは、法律の世界ではなく**倫理の世界**でありますから、倫理運動の立場から、**私人間**の賄賂の授受をも禁止しているのであります。

単なる**コンプライアンス**即ち、**法令遵守**のレベルであれば、公務員に対して賄賂を贈らなければ犯罪にはならないのでありますから、私人間で賄賂を贈っても何ら問題にはならない筈であります。

ところが、ロータリーは、高潔な職業倫理を提唱する立場から**私人間の賄賂**の授受も禁止しているのであります。

しかもロータリーは、倫理運動の立場から**賄賂の概念**を広くとらえているのであります。即ち、

ロータリーは、労働の対価として受取る**正当な報酬**、または取引の対価として受取る**正当な所得**以外の一切の**金品の授受**は、これを悉く**賄賂**と見做すのであります。したがって、これは法律概念ではなく、**倫理概念**であります。

これが基本原則であります。この立場から見ると、**盆暮の中元・歳暮**も賄賂になります。すると、その品物の受領を拒むことが、相手の善意を踏みにじることになるなど、この原則だけでは処理し切れない様々な事態が発生します。

そこで、ロータリーは、このような状況を踏まえて、**第二の原則**を立てます。それは、『**公開の原則**』(Publicity) であります。即ち、特定の物品または金銭の授受が、**賄賂**になるかどうか疑わしい場合には、それを**公開**すべし、というのであります。ロータリアンは、例会において、それが賄賂になるか否かを**公表**して、他のロータリアン**意見**を聞けばよいのであります。

『歳暮として羊羹を貰ったがこれは賄賂か』と聞いてみて、皆が『それは社交儀礼のものだから賄賂にはならない』と言えば、それで賄賂性は消えるのであります。

これに反して、例えば**ロッキード事件**の**ピーナツ**一つ**5億円**、これは誰に聞いても『それは賄賂だ』と言うでしょう。これはロータリーの倫理運動の立場から

見て完全に賄賂であります。したがって、心に疚しいことなければ堂々と公開できる筈であります。ロータリーはそここのところを見ているのであります。

第一に、ロータリアン自身が、その金品を受け取ることによって、職業関係の公正さを害しないか否か、心に疚しいことがないか否か、を自ら主観的に判断し、第二に、クラブ例会において、皆の意見を聞いて、客観的な社会倫理によって篩にかけるのであります。

このようにして、ロータリーは、20世紀初頭以来、誠に高潔な職業倫理を維持してきたのであります。

御静聴有り難うございました。

以上